

ババール と サンタのおじさん



ジャン・ド・ブリュノフ さく・え
おおくぼゆう やく

ババールとサンタのおじさん

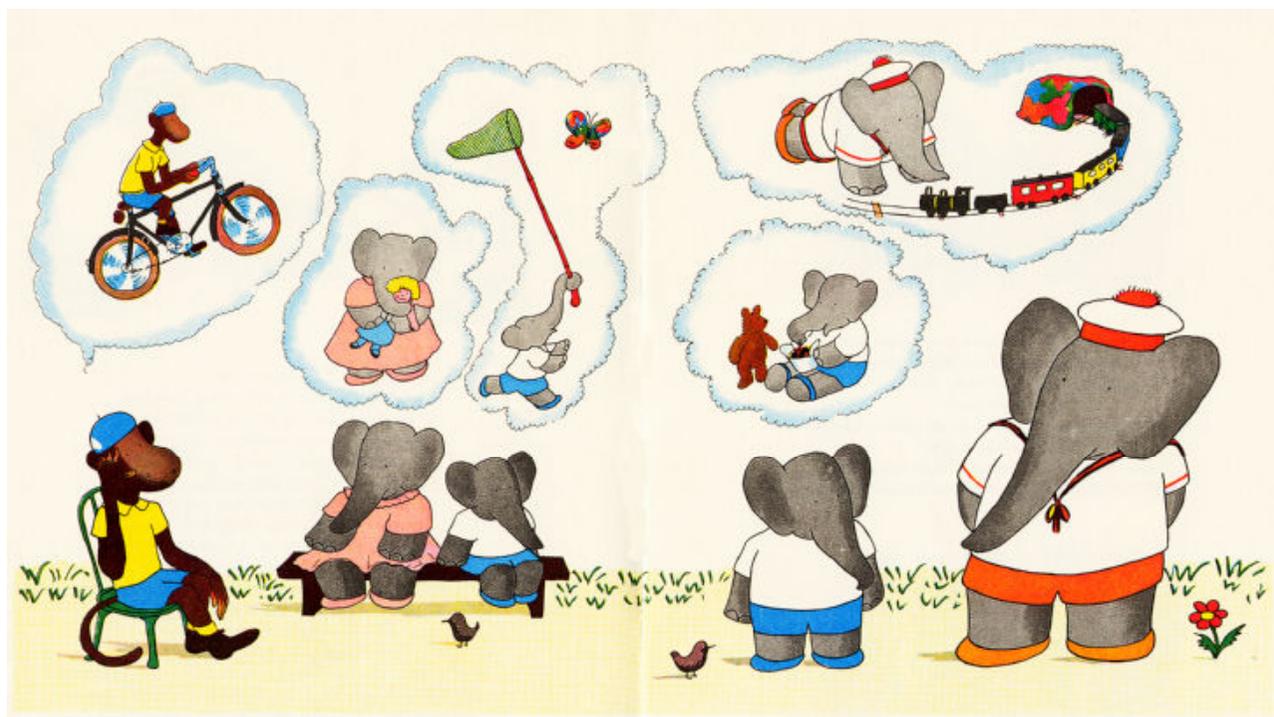
ジャン・ド・ブリュノフ さく・え
おおくぼ ゆう やく



「なあ、 みんな！」

あるひ こぎるの ゼフィルが、 アルチュール、 ポム、 フ
ロール、 アレクサンドルに よびかけます。

「きいてくれ、 さっき すげえ はなしを みみに したんだ。
にんげんの うちには、 まいとし クリスマスイヴの よるに
すっげえ やさしい おじさん、 それも もじゃもじゃ しろひ
げで あかいふくに とんがりぼうしの やつが、 そらを とん
でくるらしいぜ。 どっさり おもちゃを はこんできて、 そい
つを こどもに くれるんだとさ。 そいつ サンタの おじさん
って いうんだってな。 なかなか すがたが おがめないみたい
で、 こっちが ねむってるあいだに えんつつから しのびこむ
とか。 あくるあさ くつしたのなかに おもちゃが あるってん
で こどもたちも きたんだなって わかるらしい。 どうだ、
おれたちも そいつに ひとつ てがみを かいてみないか。 そ
うの くに、 おれらんとこにも きてくれってさ。」



アレクサンドルが います。「いいね、 やろう やろう！」
「でも おてがみ なんて かけばいいかな？」と いうのは ア
ルチュール。 そこで ポムが ひとこと。

「そりゃ サンタに かくとなれば ぼくたちの ほしいものじゃ
ないの。」

「じゃあ じっくり かんがえて かなきゃ。」

さいごに フロールが そう いうと、 みんなは くちを つ
ぐんで しばらく かんがえごと。

ゼフィルが まっさきに おもいつくのは やっぱり じてんし
ゃ。 フロールが もらえて うれしいのは おにんぎょうさんで、
アレクサンドルは むしとりあみが ほしいし、 ポムは ふくろ
いっぱい あめと くまの ぬいぐるみ。 アルチュールと き
たら てつどうもけいを ゆめみる しまつ。



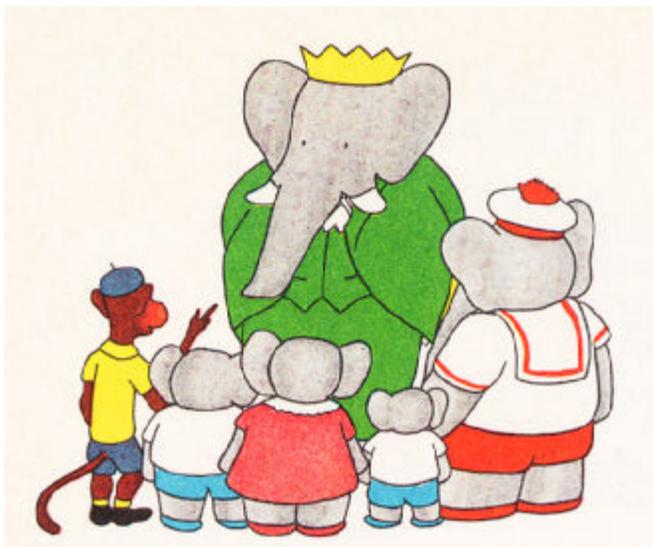
それぞれ ほしいものも きまると、 いちばん じの うまい
ゼフィルが ふでを とることに なりまして。 みんな それを
そばで まじまじ。 アルチュールが わすれず ふうとうに き
つてを はりまして。 そして ひとりずつ じぶんの なまえを
かきおわると、 うきうきと ぜんいで てがみを ポストへ
いれにいきます。





それからというもの 5にんは あさになるたび ゆうびんやさんが くるのを まちかまえて。 かげが みえると いそいで むかえにゆくのですが、 ああ ゆうびんやさんが いつも どれだけ さがしても サンタさんからの へんじは きていません。 あるひ ババールが そんな こどもたちに きづきまして。「おや どうして こどもたちが。 おもてで すっかり しょげている。」





すぐさま ババール
は こえを かけます。
「ふむ、 こどもたち
これは なにごとか
ね？」

ゼフィルは てがみ
のことを うちあけま
す。すると ババール
は このように い

いまして。

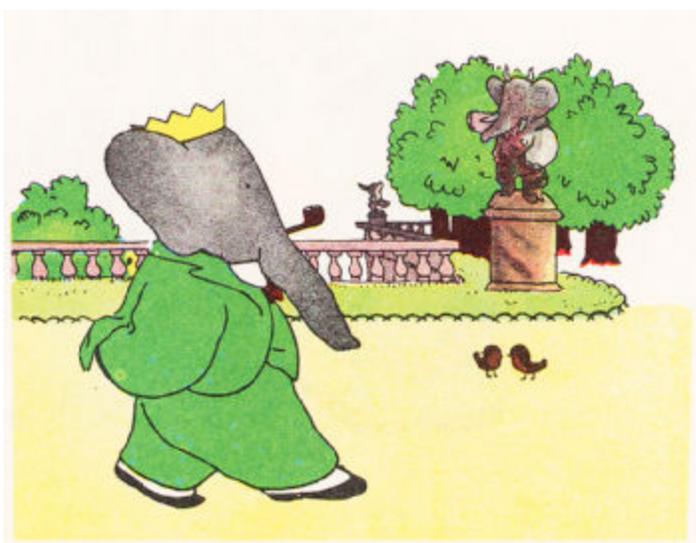
「なに、 おへんじが ないのだから？ きつてを はるの わすれ
たんじゃないか。」

「ううん、 それは ちゃんと アルチュールが。」

「となると、 サンタのおじさんは なかなか おへんじの じ
かんが とれないのさ。 まあ きばらしに あそんでなさい。
おかげで もっと いいことを おもいついたかもしれん。」

パイプを ふかせながら さんぽする ババール。 いったりき
たり あるきながら
おもうのです。

「どうして もっと
はやく きがつかな
かった！ こっちか
ら サンタさんに
たのみにいけば い
いのだ。 ぞうの
くにへ きてくれっ
て。



こうなると いまから
さがしにでるのが い
ちばん いいな。じ
かにはなしをすれ
ば むこうも むげに
は ことわるまい。」



こころを きめた ババルは、あわてて にづくりのおて
つだいに セレストを よびまして。おともしたいという セ
レストに、ババルは さとします。じぶんの るすのあいだ
くにを まかせられるのは おまえだけだと、それに むこうも
しらない やつらが いちどに おおぜいで やってきたら やっ
ぱり あいたがらないのでは ないかと。

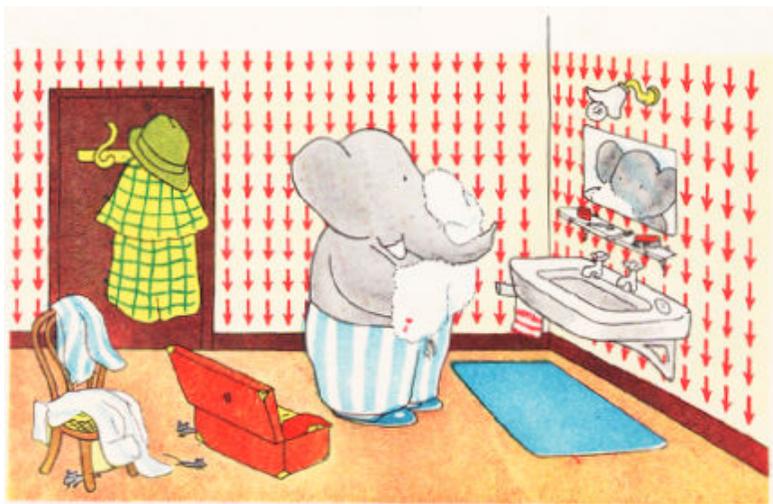
すんなりと たびは すすみ、ヨーロッパに ついた ババー
ルは れっしゃを おりまして。おしのびなので かんむりは
かぶっていません。

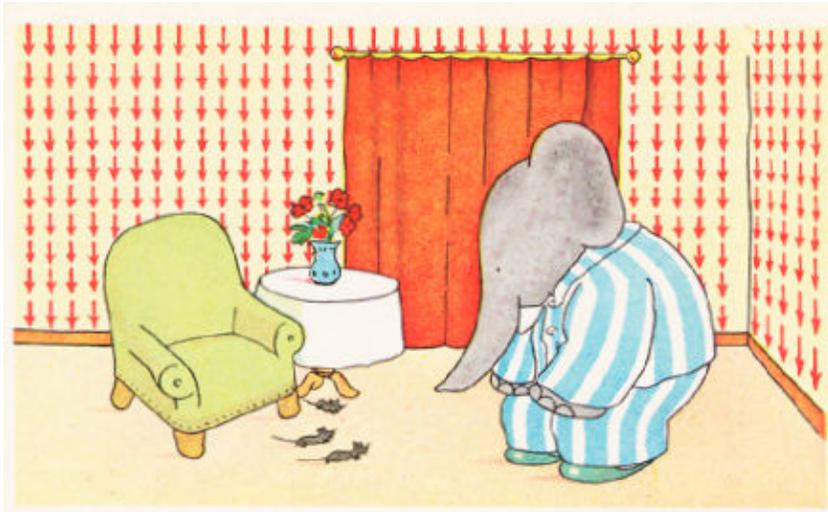




ババルが あんないされたのは こぢんまりとした むかしな
がらの ホテル。 あてがられた へやも なかなかのもので。
うわぎと ぼうしを めいで、 さっそく からだを きれいにし
ます。 ここで ちゃんとしておけば やっぱり すっきりします
からね。 とはいえ からだを ふきながら きになることも あ
りまして。「それにしても かすかに きこえる このおと、 い
ったい なんなんだ？」

てを とめて、 ぐるりと あたりを みまわしますと、 ふい
に めに とびこんできたのが なんと 3びきの こねずみ。
そのうち 1びきが おじけづくことも なく こちらに はなし
かけてきまして。「どうも こんにちは、 おおきな おかた。





あの、ここへは ながく おとまりですか？」 おじけづくこともなく はなしかけてきたので、 ババールも へんじを します。

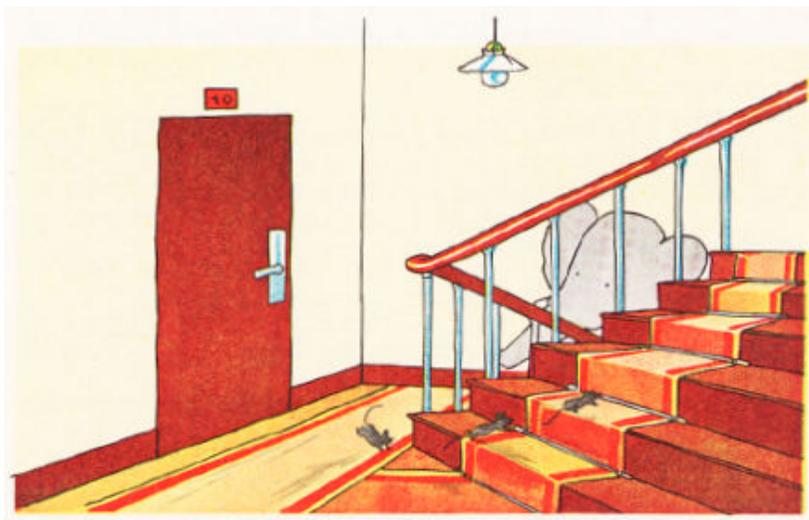
「いや、 まだ たびの とちゅうで。 ちょっと サンタの おじさんを さがしにな。」

「あなたさまは サンタさんをおさがしでしたか。 そのかたなら ここ、 このたてもものにおりますよ。 よおく ぞんじております。」 そして こねずみたちは こう いうのです。

「そのかたの おへやへ ごあんないしましょう。」

「ありがたい！ ありがたい！ ねがっても ないことだ！ いま へやぎを はおるから、 きみらに ついてゆくよ。」

ババールも びっくりして おおごえです。





「しかし いったい どこへ つれていこうと いうのだ、 この
こねずみたちは。」

かいだんの とちゅうで たちどまって いきつきしながら バ
バールは ふしぎに おもいます。

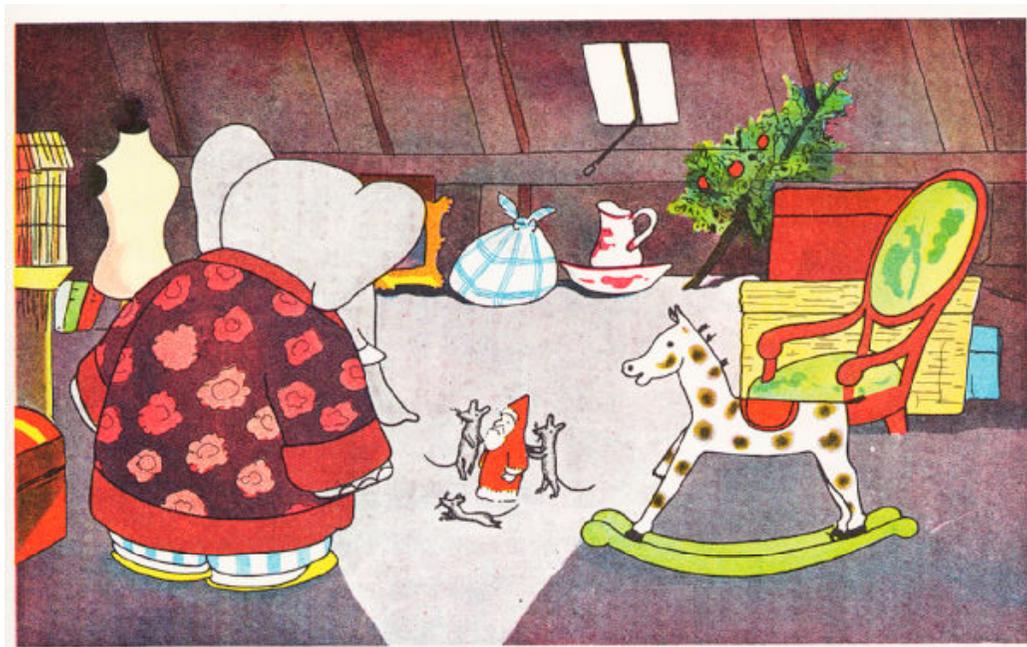
「サンタの おじさんは、 どうも このたてものの てっぺんの
へやに すんでるようだ。 すてきな ながめと ひろい おへや
が おきにいりというわけか。」

あれこれ ババールが かんがえているうち、 3びきの こね
ずみは やねうらに たどりつき、 その すみのあたりで なに
やら ちょろちょろ うごきはじめます。

「いったい どこへ いった？」

ババールが こえを かけると、 3びきの こねずみも へん
じを しまして。

「こっちです、 はやく この やねうらへ。 サンタさんを た
だいま とりはずしますから。」



ババールが おいつくと、 3びきの こねずみは そろって
ほこらしげで。

「こちらが サンタの おじさんです。 ここで ねんがらじゅう
じっと しているのです。 クリスマスイヴの ひにだけ にんげ
んは さがしにきて、 そのとしの きの てっぺんに かざるの
です。 クリスマスが おわると もとの やねうらに もどされ
るので、 わたくしどもも あのかとと あそべるといふわけで。」

ここで ババールは いいます。

「しかしだね、 わたしの さがしているのは あれで なくて、
ほんものの サンタの おじさん、 いきている サンタの おじ
さんに あいたいんであって、 にんぎょうじゃあ ないんだ！」



あくるあさ ババールの みみに、まどを そっと たたく おとが きこえて。おとの めしは すずめで、なにやら はなしがあるようで。

「あなたさまは いきている サンタのおじさんをおさがしたとか。わたくしども そのかたとそれなりの あいだがらですから、おひきあわせ いたしますよ。」

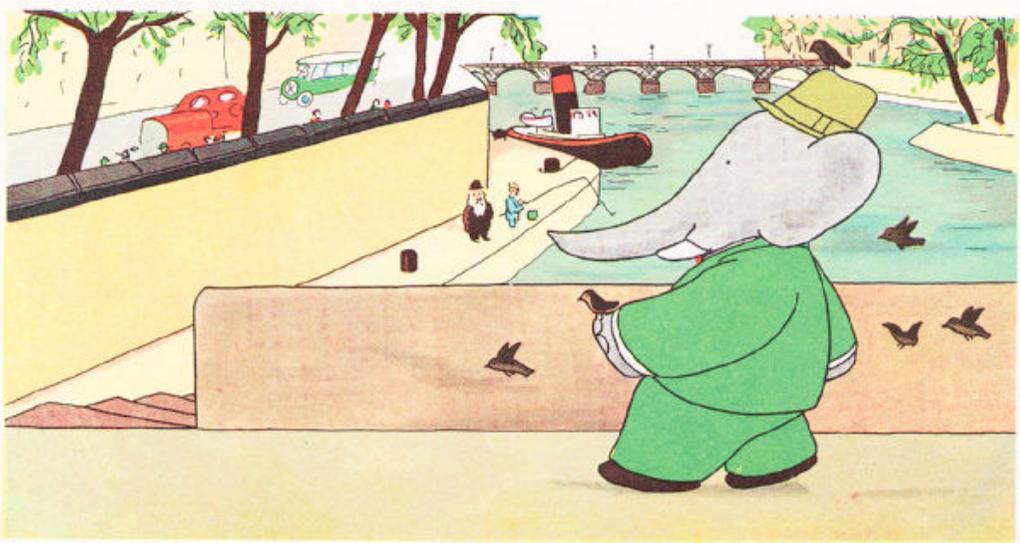


と げんきよく とびたちまして。ババールに みちあんないしつつ、おおきな はしで かわをこえて、そこで いうのです。

「つきました。いつも ここで おみかけします。ふだんは あのかた はしのしたで ねとまりを。」

「ん？ なにか おかしいぞ。」と ババールが あやしんでいると、ことりたちが そろって ちゅんちゅん。

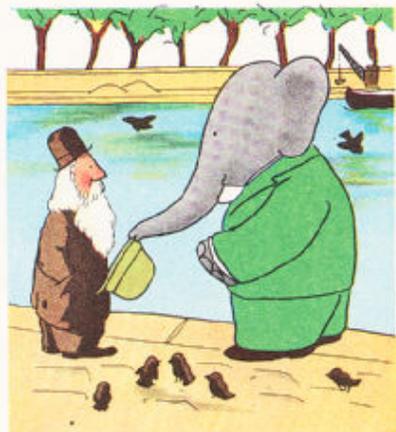
「ほら、 あのかたですよ。 あそこ、 つりびとの



おとなりに いらっしゃる。」

というわけで ババールは はとばに おりて、 おじいさんの おかおを ちらりと みて おっかなびっくり、 ごあいさつしてから たずねます。「ごめんください、 あなたが まさか ほんものの サンタさんで いらっしゃいますか。 こどもたちにおもちゃを くばるといふ あの。」

ところが おじいさんの へんじは こうです。「すまん、 ひとちがいよ。 わしの なは ラザロ・カンペオッチ。 プロの モデルじゃ。 つまりは えかきの ともだちが、 わしに サンタのおじさんという あだなを つけおってな。 いまでは そのなで とおっておるわけなんじゃ。」 がっくり。 そこでまた ババールが かわぎしのおりを とぼとぼ あるきながら かんがえなおしていると。

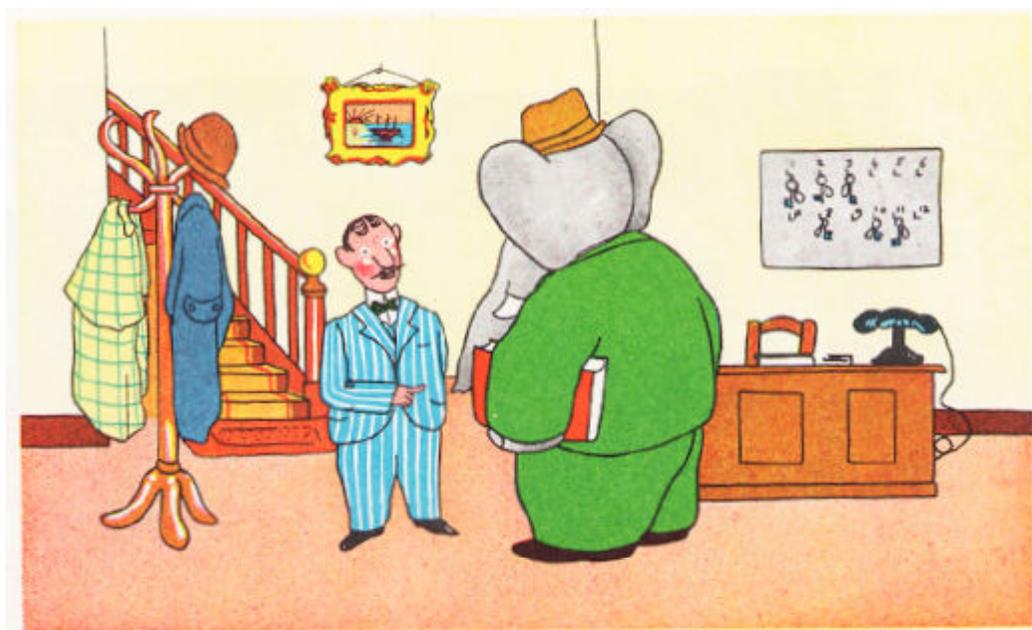


なんと ふるほんやの みせ
さきの おおきな ほんが
めにはいりまして。 サン
タのおじさんが えがかれ
ています。 すぐさま かい
まして、 じぶんの へやで
あらためてみました。 けれ



ども あいにく さっぱり わからない ことばで かかれてあり
まして。 こまってしまうと、 ホテルの しいにんに そうだん
してみると、 ありがたいことに じぶんの むすこが かよって
いる がっこうの せんせいの おうちを おしえてくれまして。
「きっと ジーリャネさんなら あなたの ごほん ほんやくして
くださいますよ。」

さっそく ババールは ジーリャネせんせいの うちの ベルを
ならします。 すぐに なかへ いれてもらえたのですが、

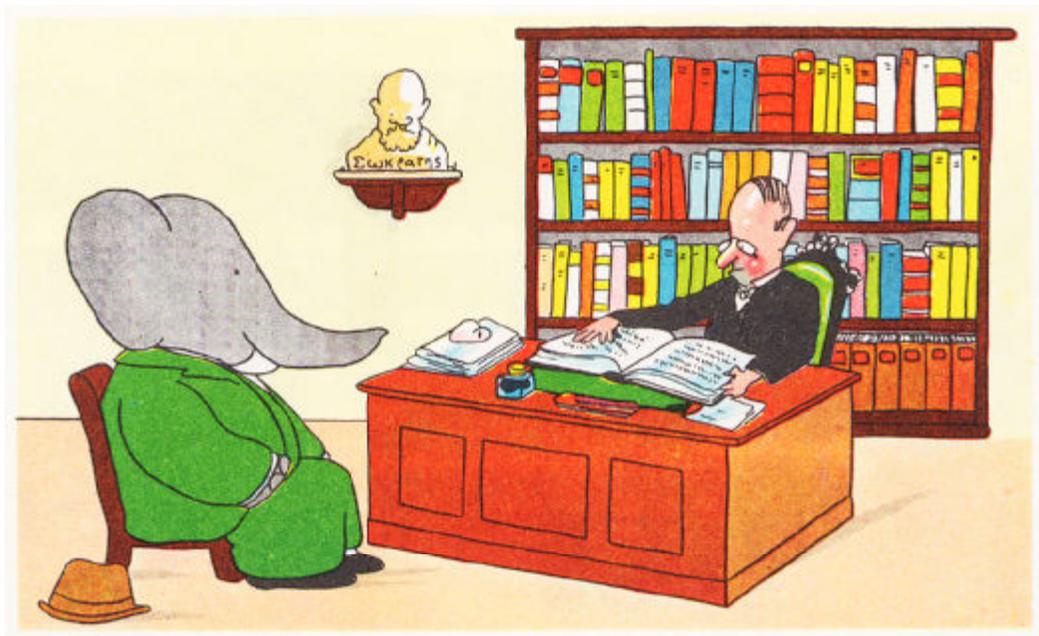




ほんを ちらりと みせるなり、
たいへん もうしわけないが じ
ぶんには よめないといわれま
して。 こんどは ウィリアム・
ジョーンズという ゆうめいな
はかせの おうちの ごしょうか
い。 それから 1じかんと あ

いだを おかず、 ババールが そのひとの しごとばを うかが
うと、 こんどは そのはかせ ほんを じっくりと あらためて
うんうん うなったりして。 えんえん ババールは またされた
あげく、 こんなふう に いわれます。

「あなたのごほん、よみとくのがたいへんむつかしい。
これはふるいゴシックもじでかかれてある。ここにはサ
ンタのおじさんのことがくわしくのっついて、そのすまい
はドコカオクソコというちいさなまちのほどちかくとな
っておる。とりあえずいまのところちゃんといえるのは
これだけだ。」





ひとまず ババルは こうえんの ベンチで また かんがえごと。すると さっきの ことりたちが こちらに きづいて、サンタさんは みつかったか ききにきましたので ババルも こたえます。

「ううむ、 まだでね。 やっと わかったのが、 すまいが ここから とおい ドコカオクソコという まちの そばだ という ことだけで。 それにしたって さがすのは ずいぶん たいへんだぞ！」

すると そのときです、 こいぬが ちかづいてきて こえを かけてきまして。

「ごめんください、 わたくし だいの とくいですぞ。」

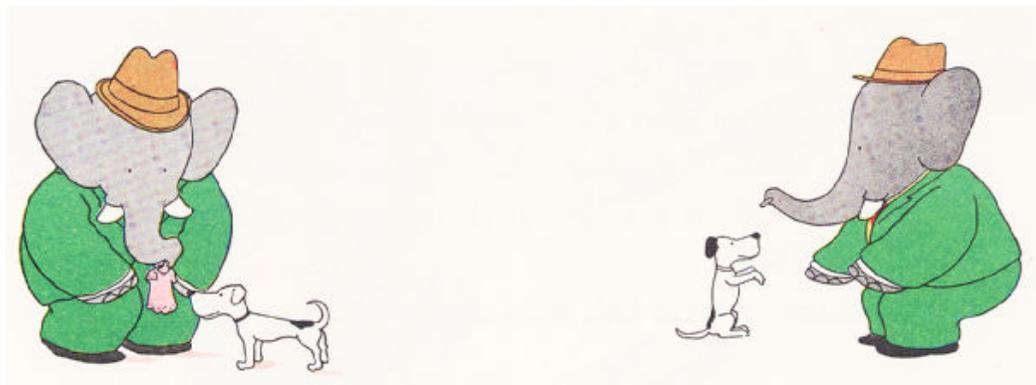




なにかを さがすのは。 なにせ ものすごく はなが ききます
からな。 あそこを あるいている おじょうちゃんの にんぎよ
うを かぐだけで、 あなたを ちゃんと ごあんないして さし
あげます。 あれを あげたのが サンタの おじさんなのですか
ら。 ぜひとも あなたの おともを させてください。 いまや
すていぬの わたくしを ぜひに。」

そのことばを きいた ババール、 めを こいぬに むけて
ひとこと。「なるほど、 では つれていこう。」

あとは いそいで かってきた さらの おたかい おにんぎよ
うを、 ヴィルジニーちゃんに みせると よろこんで じぶんの
ものと とりかえてくれまして。 さて ババールは サンタの
にんぎょうを いぬに かがせて、 ごほうびに あまいものを
あげます。





たびだつまえ ババールが また ものしりはかせの ウィリアム・ジョーンズに あいにいくと、ほんをかえしてくれて さらに もうすこし くわしく おしえてくれました。まちから 20キロほど はなれた やまのうえ もりのなかに サンタさんが すんでいるとか。ながい みちのりを こえて、ババールは はるばる ちいさな まち ドコカオクソコに たどりつきます。



そこは さむく、ものすごい ゆきでした。 ですので ババールも そなえて スキーいたを てにいれ そりを てはいします。 やまの ふもとまでは そりで すべってゆけるのですが、そこで いったん おりなければなりません。 そこからは いたをあしに はめ、 ずっしり かばんを せに、 デュック (となづけた こいぬ) を つれて ふしぎの もりを のぼってゆくのです。 やるき まんまん デュックも きゃんきゃんと ほえながら じっくり あたりを さぐります。 と ふいに たちどまって しっぽを たて、 はなを ならしまして。 ついに サンタさんの においを かぎつけたのです。



たちまち デュックは そのさきへ むかいはじめます。「とらえた、つかんだ、このにおいだ！」と わんわん おおきくほえるので、 もりじゅうに ひびきまして。ところが そのとき だれも いない このもりで なにが うごいたと おもいます？ なんと きの うしろに やまの こびとさんが かくれていたのです。デュックは ちかよって たしかめようと おもったのですが、 こっちへ むかって かためた ゆきだまを ちからいっぱい なげつけてきます。そいつを あたまに わきばらに くらってしまいまして。



ほとんど いきも できず めも みえなくって、 しっぽも
だらんと とにかく ひきかえすことにします。 もう ぜえはあ
とほとぼ。 もどってくるのを みて ババールは たちどまり
わけを たずねます。

「おやおや！ デュック、 いったい なにごとだい？」

ですので デュックは ひげを はやした こびとたちとの で
きごとを はなしまして。 ババールの へんじは こうです。

「そうだったのか！ だが なんとかしても さきへ すすまねばな
るまい。 ここは ぜひとも そのこびとたちと おちかづきに
なりたいぞ。 そやつらの もとへ つれってっくれ。」





そのあと すこしして こんどは ババールが こびとたちとはちあわせ。 あっちは こっちを こわがらせようと、 おそれず つっこんできて たまを なげてくるのですが、 ババールはへっちゃらと ばかりに はないきを ふきかけまして。 たちまち ぜんいん ひっくりかえって おりかさなあって、 おきあがるや かけあしで にげだして おともなく きえてしまいます。

ババールは どっと わらって、 また においを かぎつけた デュックのうしろから やまを のぼっていきます。

こびとたちの むかったさきは サンタさんの まえ。そこで
まくしたてたのが、ながい はなを もつ おおきな いきもの
のことに、そいつに すごい いきおいで はないきを かけ
られ すってんころりん おいはらわれたこと。サンタの おじ
さんは はなしに ききいります。さらに こびとたちに よれば、
そのおおきな いきものに けちらされたところは ここから
ほんのすぐそば、ぶさいくな いぬころの あんないで ま
っすぐ このサンタの ひみつきちに むかっているとのこと。





そのとおり どんどん せまってゆく ババールでしたが、かたや ぶぶきも これでもかと ひどくなっていきます。あまりに かぜが つよいので、ゆきも めや はだに つきささるみたいで。もう なんにも まえが みえません。ババールも ひっして おいかぜに たちむかいますが、もはや むりに あるくのも あぶないので あなを ほって しのぐことにします。





そこで ストックと スキーいた、 あと ゆきの かたまりで やねをつくります。 というわけで しばし ゆきやどり。

「なんと さむい。 じまんの はなも こおりそうぞ！」

そう ババールの おもうそばで、 デュックも もう へとへと。 そのときです。 ババールの あしもとから じめんが くずれて、 あっというまに デュックもろとも どこへやら！





なんと しらずしらず くうきあなの えんとつを めけて、
サンタさんの すみかに おちていたのです！ ババールも おも
わず おおごえを あげまして。「サンタの おじさん！ デュッ
ク、 わたしたちは ついたんだ！」

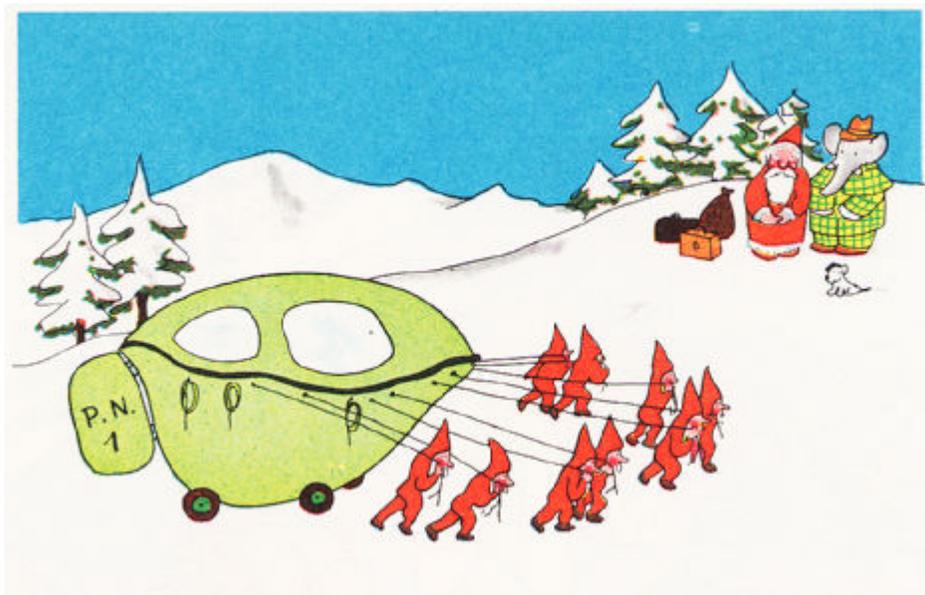
すると つかれも さむさも、 うれしささえも ふっとんで、
ぱったり きを うしなってしまうまして。 サンタの おじさん
が いいます。「いそげ、 やまの こびとたち。 いざござは
ひとまず わすれて、 とにかく このひとの ふくを めがせて
からだを あたためるんじゃ。」





たちまち みんなは おおあわて。 ふくを めがせて、 アル
コールで ひとつおり マッサージしてから おおきな ブラシで
きつく ごしごし。 おくすりがかりの こびとも きつげぐすり
を のませます。 なんとか たちなおった ババールは、 おき
もち かたじけないと ことわってから、 サンタさんと おいし
い スープを ごいっしょします。





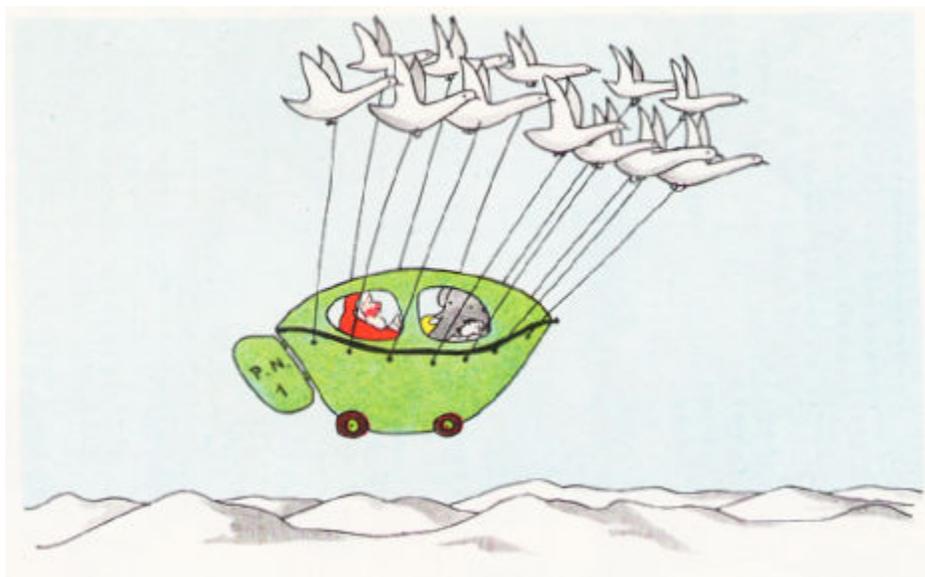
ババルに ことわります。 クリスマスイヴの よるは もう
いそがしすぎて たくたで、 どうしても ぞうの くには
いけないのだと。 さらに ことばを つづけて。

「せかいの こどもたちにおもちゃを くばる。 その いつもの
しごとでさえも きよねんは いっぱいっばいでな。」

そこで ババルは いいます。

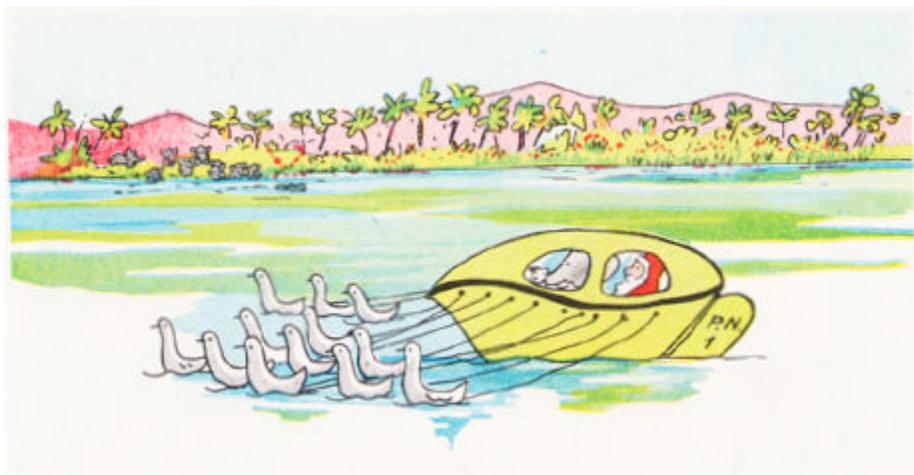
「これは これは。 サンタのおじさん、 よく わかりました。」

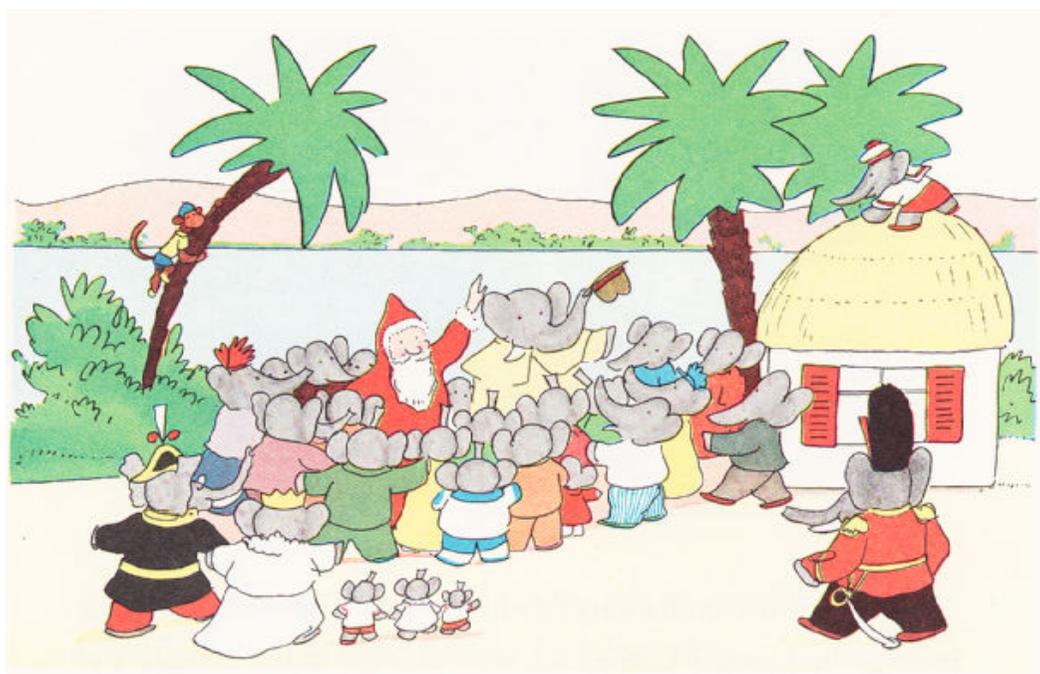




でしたら むしろ それまで このひみつきちからはなれて、
そとの くうきを すって、 しっかり おやすみしては いかが
でしょう。 いますぐにでも そうの くへ まいりましょう。
ひなたぼっこするのです。 たっぷり やすめば クリスマスには
げんきいっぱいですぞ。」

このもうしでに そそられて、 サンタの おじさんは こびと
たちに ちゃんと るすばんしてるよう いいつけます。 そうし
て ババールと デュックを つれて、 そらとぶマシン PN1
ごうへ のりこみ しゅっぱつです。





とうちゃく。 サンタの おじさんが けしきに みとれていると、 ぞうという ぞうが かんげいしようと あちこちから あつまってきます。 ポム、 フロール、 アレクサンドルも おおはしゃぎ。 よく みえるよう アルチュールは おうちの やねへ、 ゼフィルは きのうえへ のぼっています。 さわぎが ひとだんらくすると、 おきさきの セレストが サンタの おじさんに 3にんの こどもと アルチュール、 ゼフィルを ひきあわせまして。



「おお てがみのぬしは きみたちか。 あえて うれしい。 すばらしい クリスマスを やくそくしよう。」と サンタさんは いいます。

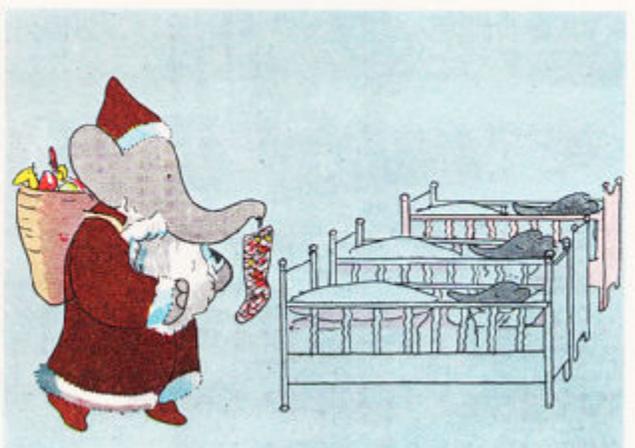


くりかえし サンタさんは シマウマで さんぽに でかけるので、
ババールは それに じてんしゃで ごいっしょしまして。
それだけでなく サンタさんは まいにち 2じかん たのしく
ひなたぼっこ、これは カプロッスせんせいの おすすめです。
ハンモックに ねころがっていると、ときどき ポムに フロール
あとアレクサンドルが のぞきにくるのですが しずかにして
けて じゃまは しません。



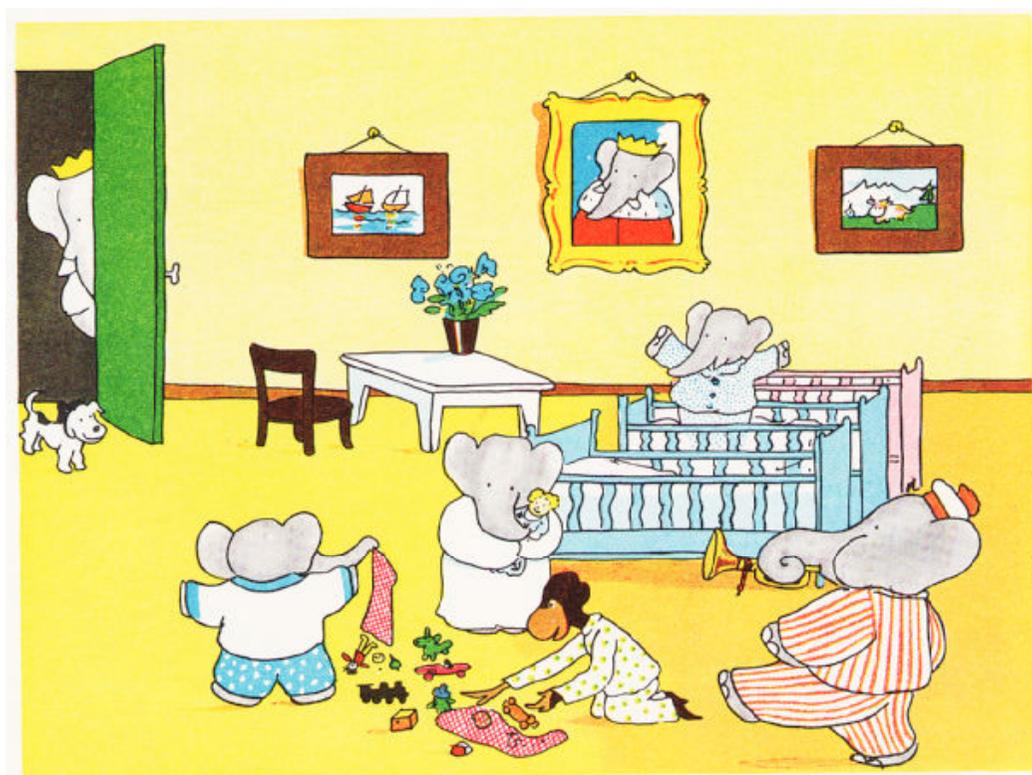


サンタのおじさんはあるひババールにいます。
「わがともよ、いろいろしてくれてありがとう。もうすぐクリスマスだ。もういかねばならん。まっとるにんげんのこどもたちにおもちゃをくばらんと。とはいえ、こぞうさんらとしたやくそくもわすれとらんぞ。このふくろになにがはいっとるとおもう？ほんもののサンタふくだ、おまえさんサイズのな！そらもとべるようになるまほうのふくに、いつでもおもちゃいっぱいのかご。あんたさんはクリスマスイヴのよる、ぞうのくにでわしのかわりをするんじゃ。わしもやることがおわたたらきつともどってきて、あんたさんのこどもらにええクリスマスツリーをとどけてやるぞい。」



クリスマスイヴの よる、 ババールは サンタさんに いわれ
たとおりに します。 ふくと ひげを みにつけると、 たちま
ち からだが かるくなって、 とべるように なったのが わか
ります。

「ほんとうに おどろいた。 これなら おもちゃも ぜんぶ く
ばりきれる。」



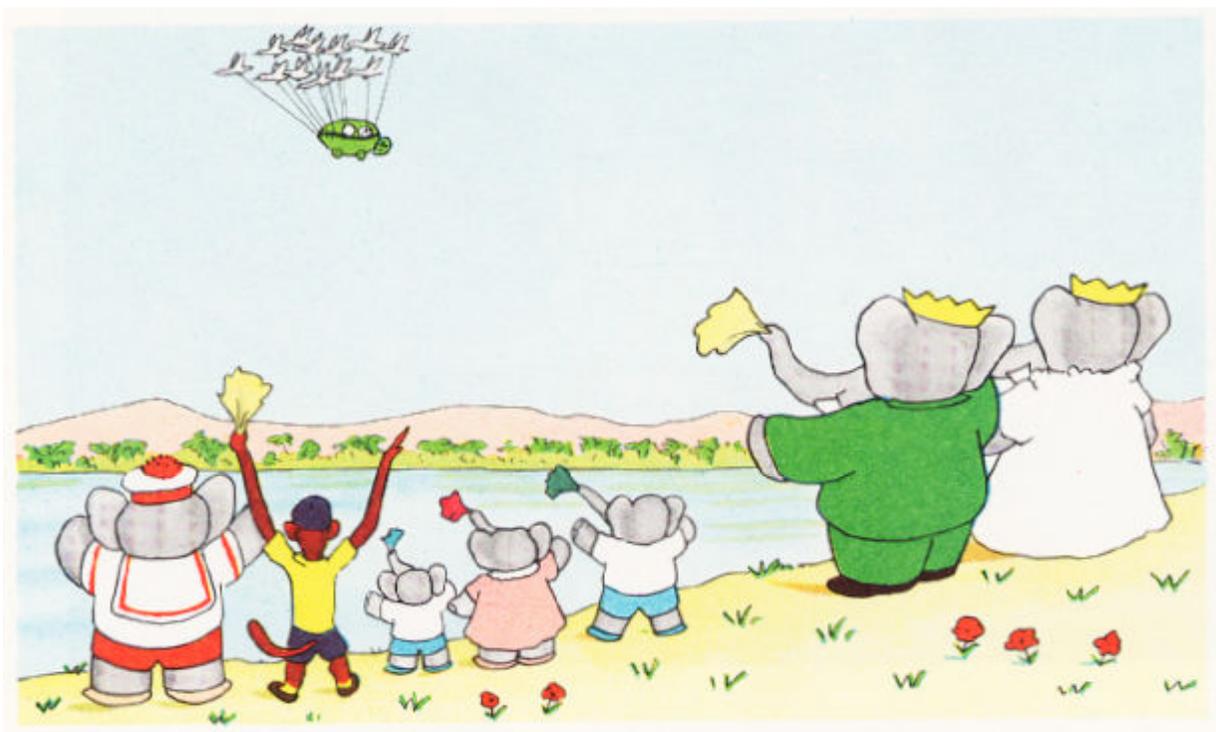
よるが あけるまでに おわらせようと おおわらわ。 そうし
て クリスマスの あさ。 どのうちでも めを さました こ
ぞうは みんな おおよろこびで！ おしろでも おきさきの セ
レストが それぞれのおへやを ちらっと のぞくと、 ポムは
くつしたを さかさに、 フロールは おにんぎょうを あやし、
アレクサンドルは ベッドで とびはねながら おおごえ。「とっ
ても すてきな クリスマス！ クリスマスう！」



アルチュール、ゼフィル、ポム、フロール、アレクサンドル …… みんな、こんなに きらきら かがやく それこそ うつくしい もみのきを、うまれて はじめて めに しました。

サンタの おじさんが やくそくどおりに もどってきて、このすてきな もみのきを とどけてくれたのです。おかげさまで かぞくの だんらんも とっても うまく いきました。

あくるひには、サンタのおじさんもまたマシンでとびたって、じぶんのひみつきちへこびとさんのところへもどります。おおきなみずうみのほとりで、ババールとセレスト、アルチュールにゼフィルあと3にんのこどもたちがそろってハンカチをふります。ともだちになったサンタさんがかえっていくのはちょっとさみしいけれど、うれしいことにまいとしぞうのくにへおやすみにくるとやくそくしてくれましたとさ。



Original Text: *Babar Et Le Père Noël* (1936/1941)

Original Author: Jean de Brunhoff (1899-1937)

※著作者の死後および著作公表後61年が
すでに経過しているため、この作品を
日本国内におけるパブリックドメインとして
利用しております。もし何か問題があるよう
でしたらご指摘の方いただけると幸いです。

ババールとサンタのおじさん

<http://p.booklog.jp/book/41023>

自作 PDF 版 2012年6月14日 初版

著者 : ジャン・ド・ブリュノフ

訳者 : 大久保ゆう

翻字協力 : 山下優香

訳者 twitter : @bsbakery

訳者サイト : <http://www.alz.jp/221b/>

発行 : Alz

発行元情報 : <http://www.alz.jp> & <http://p.booklog.jp/users/alz/profile>

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」
(<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>) によって公開されています。

上記のライセンスに従って、訳者に断りなく自由に
利用・複製・再配布することができます。

ブックログのペーパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41023>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのペーパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社 paperboy&co.